東京音楽大学リポジトリ
Tokyo College of Music Repository

三浦環の《冬の旅》（2）：訳詞と1946年録音に見る演奏の覚書

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2024-02-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 早坂, 牧子 メールアドレス: 所属:
URL	https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/2000040

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

三浦環の《冬の旅》(2)：
訳詞と1946年録音に見る演奏の覚書

早　坂　牧　子

東京音楽大学研究紀要 第47集 －2023－

三浦環の《冬の旅》(2)：訳詞と1946年録音に見る演奏の覚書

早 坂 牧 子

《冬の旅》原詩と三浦環訳 (2)

前集所収の「三浦環の《冬の旅》(1)」に続き、本稿では三浦環の訳によるシューベルト《冬の旅》の訳詞及びヴォーカル・スコアを示す。今回収録するのは、第8曲「回顧」から第15曲「烏」までの計８曲である。前稿と同じく、まず以下に原詩と1944年演奏会プログラム[1]に基づく三浦の対訳を示し、巻末にNHKアーカイブス所蔵の録音[2]に基づいて三浦環の歌唱スタイルを反映させたスコアを添付した。三浦環による《冬の旅》の演奏史と、史料の詳細については、前稿を参照のこと。

８．‘Rückblick’「回顧」

Es brennt mir unter beiden Sohlen,	我が靴あつし
Tret’ ich auch schon auf Eis und Schnee,	冷たき氷をふめど
Ich möcht’ nicht wieder Atem holen,	呼吸（いき）たえだえに
Bis ich nicht mehr die Türme seh’.	高殿（たから）は見もやらで
Hab’ mich an jeden Stein gestossen,	われ石につまづきつ［く］
So eilt’ ich zu der Stadt hinaus;	いそぎ町をすぎぬ
Die Krähen warfen Bäll’ und Schlossen	烏は落とす雪玉を
Auf meinen Hut von jedem Haus.	わがかさに
Wie anders hast du mich empfangen,	われにいつわりし町
Du Stadt der Unbeständigkeit!	移りやすき町
An deinen blanken Fenstern sangen	かの日汝が窓辺に
Die Lerch’ und Nachtigall im Streit.	うぐいすなきかわし
Die runden Lindenbäume blühten,	菩提樹の花さき
Die klaren Rinnen rauschten hell,	清き小川の水
Und ach, zwei Mädchenaugen glühten! -	君がまなざしに
Da war’s geschehn um dich, Gesell!	其［こ］の胸ときめきし［に］
Kommt mir der Tag in die Gedanken,	ふりかえりて思はる
Möcht’ ich noch einmal rückwärts sehn,	今一度見たほしよ

1　「玉川大学教育博物館ガスパール・カサド 原智恵子コレクション」所蔵、「軍人援護資金醵集のため 三浦環獨唱會 協奏 原智恵子」（受入番号70-0-78）。

2　NHKアーカイブス所蔵、「三浦環 独唱曲集 シューベルト 冬の旅」(I) ～ (III)。

Möcht' ich zurücke wieder wanken,	今音なくたたずみたき
Vor ihrem Hause stille stehen.	君が窓辺よ

三浦の訳は、内容は原詩にほぼ忠実なものとなっているが、プログラム記載の歌詞とNHK所蔵録音には若干の差異が見られる。例えば第二連１行はプログラムでは「われ石につまづきつ」であるが、録音では「われ石につまづく」と歌っている。同じく第四連４行はプログラムは「其の胸ときめきしに」、録音は「この胸ときめきし」である。過去の演奏会ではプログラム通りに歌っていたのかもしれないが、音数に合わせより無理のないシラブルの数に変えたものだろう。第五連４行「今一度見たほしよ」の箇所はプログラムには掲載がなく、録音からはこのように聞き取れるが、正確でない可能性がある。

三浦の歌唱は、跳躍を含む21～22小節の音程がやや不安定になるものの、同じフレーズが繰り返される24～25小節ではきちんと修正がかけられるなど、比較的コントロールされている。冒頭より第二連終わりまでのテンポは93～125BPM、最頻値は106BPMである。第三連に入る手前（27小節）、フェルマータに向かってピアノがテンポを91、44、22BPMと落とし、第三連のテンポはおよそ68BPM、現代の演奏では83BPM程度で歌われることが多いが、三浦はかなり朗々と歌っている。第四連の最終行、「この胸ときめきし」に軽くリタルダンドがかけられ（46小節）、テンポは54BPMまで落ち込むが、48小節でピアノが58、87、106BPMと急速に冒頭のテンポに戻って第五連（49～58小節）が歌われる。ト長調に転調する59小節以降テンポが緩み、62～65小節は70BPM前後、66小節から最後までは60BPMから次第にリタルダンドがかけられ、36BPMまでテンポが落ちる。演奏時間約３分20秒。

９．'Irrlicht'「鬼火」

In die tiefsten Felsengründe	鬼火にさそわれ
Lockte mich ein Irrlicht hin:	岩間にまよいぬ
Wie ich einen Ausgang finde	いで行かんとすれど
Liegt nicht schwer mir in dem Sinn.	道更に見えず
Bin gewohnt das Irregehen,	道ふみまようも
'S führt ja jeder Weg zum Ziel:	われは恐れず
Unsre Freuden, unsre Leiden,	喜びも悲しみも
Alles eines Irrlichts Spiel!	鬼火のわざなれ
Durch des Bergstroms trockne Rinnen	岩間の流れに
Wind' ich ruhig mich hinab -	そいて行きなん
Jeder Strom wird's Meer gewinnen,	流れは海に流れ
Jedes Leiden auch sein Grab.	なやみはおくつきに

56BPMに始まり、曲の前半、27小節目までは50～60台を推移する一方、テンポは48～

93BPMと自由に揺れ、緩急のついた演奏となっている。例えば13小節目「道更に見えず」では、「見えず」の三連符に向かい歌のテンポが49、48、25BPMと緩むが、その後ピアノが同じモチーフを78、72、93BPMで奏して応え、切迫感のある表現となっている。また25小節には、３拍目の３連符２つ目（F#5）に原曲にないフェルマータが置かれる。後半28小節以降では、上行モチーフの最高音に向かってテンポが緩む傾向が顕著である。最後39小節では、原曲では３拍目２つ目の32分音符（G5）にフェルマータが置かれるが、三浦はこれに加え４つ目の32分音符（A#4）にもフェルマータを付し、カデンツを強調している。演奏時間約２分40秒。

10. ‘Rast’「休息」

Nun merk’ ich erst, wie müd’ ich bin,	つかれし此身よ
Da ich zur Ruh’ mich lege;	いこいてはじめて知りぬ
Das Wandern hielt mich munter hin	さまよい越え来し
Auf unwirtbarem Wege.	けわしき山路
Die Füsse frugen nicht nach Rast,	我が足ただ動き
Es war zu kalt zum Stehen,	とまればこごゆ
Der Rücken fühlte keine Last,	たよりなきつかれし此身
Der Sturm half fort mich wehen.	風にふかれてよろめく
In eines Köhlers engem Haus	すみ焼くしずかやに
Hab’ Obdach ich gefunden;	いこいをもとめぬ
Doch meine Glieder ruhn nicht aus:	しびれし我が手足
So brennen ihre Wunden.	傷さえいたむ
Auch du, mein Herz, in Kampf und Sturm	吹きすさむ嵐に
So wild und so verwegen,	胸くるわしく
Fühlst in der Still’ erst deinen Wurm	いこいて身にしむ
Mit heissem Stich sich regen!	我が身のつかれ

可能な限り端的な文語調で原詩の内容が表現されているが、一音に２シラブルが当てられる箇所も多く、喋り言葉のニュアンスが活かされる。「我が身のつかれ」が録音では「我が身などかれ」のように聞こえるなど、やや子音の甘い部分があるが、全体的には言葉の聞き取りやすい歌唱となっている。テンポの最頻値は40BPM。演奏時間約３分40秒。

11. ‘Frühlingstraum’「春の夢」

Ich träumte von bunten Blumen,	夢みぬ花盛りを
So wie sie wohl blühen im Mai,	春甘き五月を
Ich träumte von grünen Wiesen,	夢みぬ緑の野辺を
Von lustigem Vogelgeschrei.	四方にさえずる小鳥の歌を

Und als die Hähne krähten,	にわとりの声に
Da ward mein Auge wach;	夢やぶれて
Da war es kalt und finster,	暗くつめたき朝の
Es schrieen die Raben vom Dach.	屋根に鳴く烏
Doch an den Fensterscheiben	誰（た）ぞえがきしや
Wer malte die Blätter da?	窓辺に氷の花を
Ihr lacht wohl über den Träumer,	我が春の夢をあざわらうにや
Der Blumen im Winter sah?	氷の花よ
Ich träumte von Lieb' um Liebe,	夢みぬ恋の君を
Von einer schönen Maid,	ゆかしき乙女を
Von Herzen und von Küssen,	あつきなさけを
Von Wonne und Seligkeit.	恋の希望（のぞみ）を
Und als die Hähne krähten,	にわとりの声に
Da ward mein Herze wach;	夢やぶれて
Nun sitz' ich hier alleine	ここに只一人
Und denke dem Traume nach.	夢をたどる
Die Augen schliess' ich wieder,	まなことじつつ
Noch schlägt das Herz so warm.	あつき心を思う
Wann grünt ihr Blätter am Fenster?	いつかむかえん春の夢を誠に
Wann halt' ich mein Liebchen im Arm?	いとし君をわれに

前曲同様、一音に２シラブルが当てられる箇所が散見され、中には４シラブルを詰め込んだ箇所（84小節）も見られる。四分音符一つに２シラブルを入れる際は、最初のシラブルを短く詰め16分音符＋付点八分音符のリズムにしていることが多い。

Etwas bewegt（いくらか動いて）の指示がついた曲冒頭～14小節までは150BPM程度。15小節からの*Schnell*（早く）のセクションは一転して、テンポは前のめりに180BPMとなるが、23小節から130BPMに緩んで、フェルマータで音楽は完全に停止する。27小節からの*Langsam*は、40BPM程度でゆったりと歌われる。その後*Etwas bewegt*と*Schnell*が再び同テンポで奏され、最後の*Langsam*は最初よりもやや動いて77BPM程度。85小節は次第にリタルダンドがかかり、３拍目裏にフェルマータが置かれ、最後の二音C5とA4の間はポルタメントで滑らかにつながれて、カデンツが強調される。演奏時間約４分10秒。

12. 'Einsamkeit'「孤独」

Wie eine trübe Wolke	うすずみの雲は
Durch heitre Lüfte geht,	風にゆらぎて
Wenn in der Tanne Wipfel	こずえのみそらに
Ein mattes Lüftchen weht:	走る［が］ごとし［く］

So zieh' ich meine Strasse	わが足おもく
Dahin mit trägem Fuss,	ただ一人
Durch helles, frohes Leben,	まばゆき道を
Einsam und ohne Gruss.	さみしくゆく
Ach, dass die Luft so ruhig!	風静かにて
Ach, dass die Welt so licht!	安けき今日なれど
Als noch die Stürme tobten,	嵐の昨日は
War ich so elend nicht.	今日のなやみはあらざりし

原曲では八分音符の7小節のアウフタクトで始まるところを、三浦は7小節1拍目から始めている。「うすずみ」の「うす」を八分音符アウフタクト+八分音符に割り振らず、小節頭から16分音符+八分音符の組み合わせとしたのは、「う」を短く発音したほうが言葉が聞き取りやすいと判断してのことだろうか。第一連4行は、プログラムでは「走るがごとし」であるが、NHK所蔵の録音では「走るごとく」と歌われる。この曲の鼻濁音（「ゆらぎて」の「ぎ」、「ごとく」の「ご」、「あらざりし」の「ざ」など）で三浦は鼻母音をかなり強調しており、その直前の /a/ を含む音も、通常会話で発音する際よりも暗い母音の発音をしている。

基本テンポは40BPM前後で一定している。最後35小節からは多少緩んで35BPM、最後には前曲同様フェルマータ・ポルタメントのカデンツが置かれる。演奏時間約2分40秒。

13. 'Die Post'「郵便」

Von der Strasse her ein Posthorn klingt.	町よりひびく郵便のラッパ
Was hat es, dass es so hoch aufspringt,	あやしく高鳴る
Mein Herz?	わが胸、わが心
Die Post bringt keinen Brief für dich.	文はわれに来たらねど
Was drängst du denn so wunderlich,	などてかくはときめく
Mein Herz?	わが心、胸なれや
Nun ja, die Post kommt aus der Stadt,	人にきかぬ町
Wo ich ein liebes Liebchen hatt',	なつかしき君住む町よりの
Mein Herz!	郵便
Willst wohl einmal hinübersehn,	たずね見まほしや
Und fragen, wie es dort mag geh'n,	かなたのありさま、なつかしい
Mein Herz?	いかにいかにおはす［る］や、なつかしき［や］
	君

付点のリズムを活かした「ラッパ」、配達員の掛け声のような「ゆうびーん」など、本曲の歌詞の割り付けには三浦の言葉の音響感覚が活かされている。このような歌詞翻訳からは、彼女が単に詩をそのまま訳すというのではなく、言葉と音の関係によって想起されるイメージを重視し

て訳詞を選択していたことが伺える。一音に2シラブルが割り振られる際は、やはり最初のシラブルを短く、後を長くしてリズムを作っている。第四連３行は、プログラムでは「いかにおはすや、なつかしき」となっているが、録音では「いかにおはするや、なつかしきや」に聞こえる。但し、「なつかしきや」の「や」（90小節）手前で三浦はブレスを入れこの音を歌いなおしており、そもそも「や」ではなく高音のＡ♭5を歌いやすい「あ」の母音で歌っただけという可能性もあるかもしれない。

第一・三連のテンポは91～100BPM、第二・四連は緩んで56～66BPMで、最後90小節でややリタルダンドがかけられる他は、大きなテンポの揺れなく歌われる。演奏時間約２分30秒。

14. ‘Der greise Kopf’「霜置く頭」

Der Reif hat einen weissen Schein	我がかしらに
Mir über’s Haar gestreuet.	真白き 霜のおきて
Da glaubt’ ich schon ein Greis zu sein,	われよわい（齢）ふりて
Und hab’ mich sehr gefreuet.	嬉しき事と思いしに
Doch bald ist er hinweggetaut,	霜はとけさりて
Hab’ wieder schwarze Haare,	黒きわがかしら
Dass mir’s vor meiner Jugend graut -	いとわしきわかきわれ
Wie weit noch bis zur Bahre!	わが墓遠し
Vom Abendrot zum Morgenlicht	霜は一夜に
Ward mancher Kopf zum Greise.	わがかみをかざれど
Wer glaubt’s? Und meiner ward es nicht	とけてわがかみくろし
Auf dieser ganzen Reise!	旅路ながけれど

基本的に一音一シラブルで歌詞を割り付けている部分が多いが、一音に「わかきわれ」の５シラブルを付す（22小節）など、ところどころに複数シラブルを詰め込む処置が見られる。第一連は40BPM程度、第二連48BPM、第三連40BPMと全体に安定したテンポで歌われ、最後の行「旅路ながけれど」が繰り返される際には35BPMまで緩む。演奏時間約３分。

15. ‘Die Krähe’「烏」

Eine Krähe war mit mir	一羽のからす
Aus der Stadt gezogen,	旅立ちし日より
Ist bis heute für und für	われにつきまとい
Um mein Haupt geflogen.	去りてもやらず
Krähe, wunderliches Tier,	からすよ、黒きものよ
Willst mich nicht verlassen?	などて去らぬや
Meinst wohl bald als Beute hier	なれはわがなきがらを
Meinen Leib zu fassen?	はまんとまつや

Nun, es wird nicht weit mehr gehen	つかれはてしわれ
An dem Wanderstabe.	とおくも行けじ
Krähe, lass mich endlich sehn	からすよつきまとえや
Treue bis zum Grabe!	わが終わりの日まで
	わがおくつき［終わりの日］まで

本曲で三浦は、自然な日本語の歌詞のリズムを優先し、原曲のリズムや音を改変することを躊躇していない（21、33小節）。プログラムでは最後「からすよつきまとえや / わが終わりの日まで / からすよつきまとえや / わがおくつきまで」となっているが、録音では「わが終わりの日まで」が繰り返され「奥津城」の語が使われていない。全体的に歌詞は分かりやすいが、「はまんとまつや」（食べようとして待っているのか）の文語表現は、文字情報がなければ、現代の耳には一聴で理解するのは難しいかもしれない。

大きなテンポの揺れはなく、全曲はこの曲の演奏テンポとしてはやや早めの52～55BPMで歌われる。録音からは、三浦が曲の各セクションにおいて巧みに声の表現に変化を加えている様が感じられる。一羽の烏が追ってくる情景を歌う第一連は淡々と、烏へ呼びかける第二連は明るささえ感じる軽さで、いつまでも去ろうとしない烏に不吉な予感を募らせる第三連は次第に声量を増し劇的な表現で歌われ、全曲の中でも、特に印象的な歌唱のひとつであった。演奏時間約１分35秒。

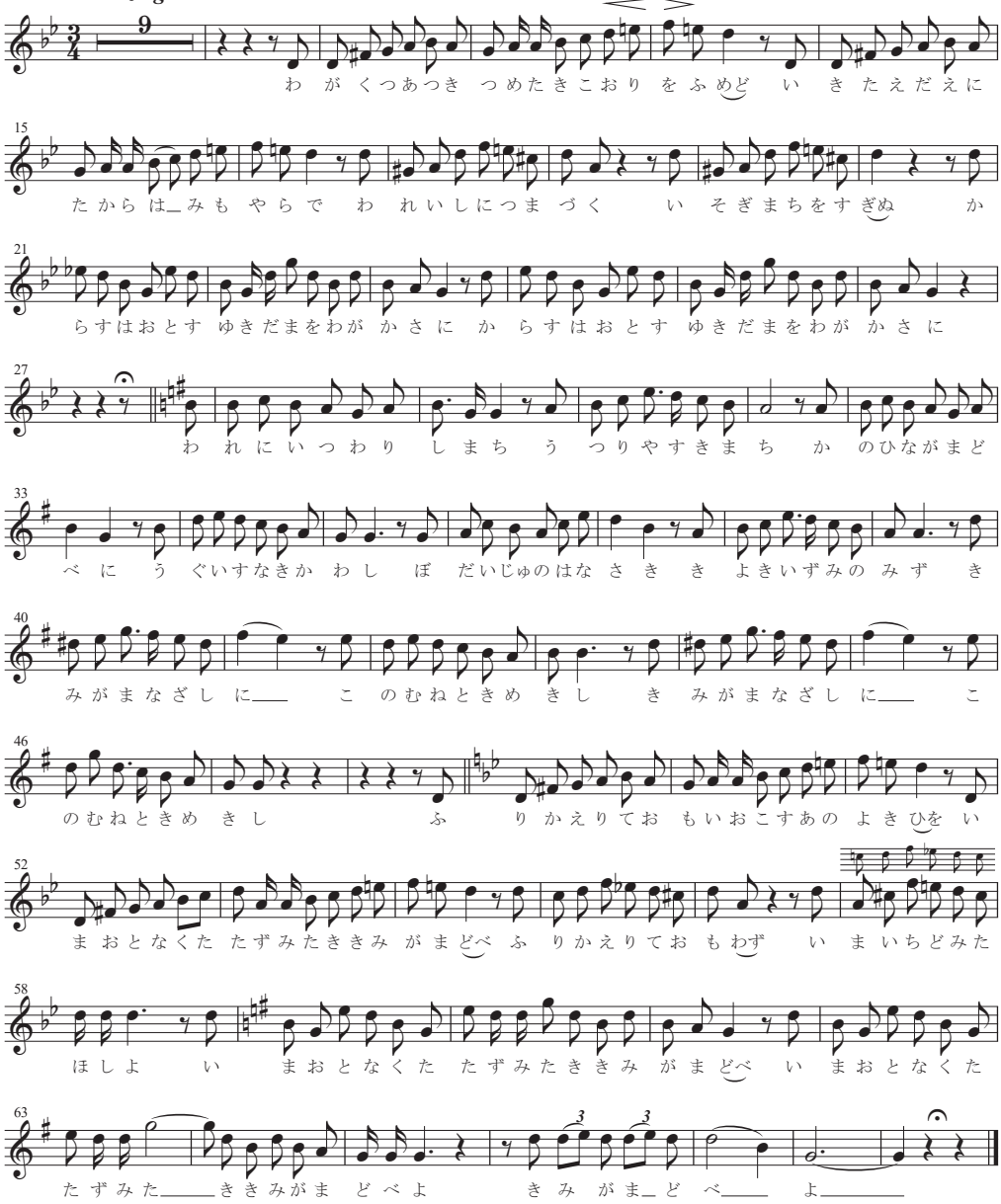
次集では第16～24曲を紹介する予定である。

＊本研究にあたり、JSPS科研費 JP20K12896の助成を受けた。また、本研究の成果はNHK番組アーカイブス2021年後期学術利用トライアルの制度を利用した調査結果に基づく。プログラム調査にあたっては、玉川大学教育博物館「ガスパール・カサド 原智恵子コレクション」の協力を得た。

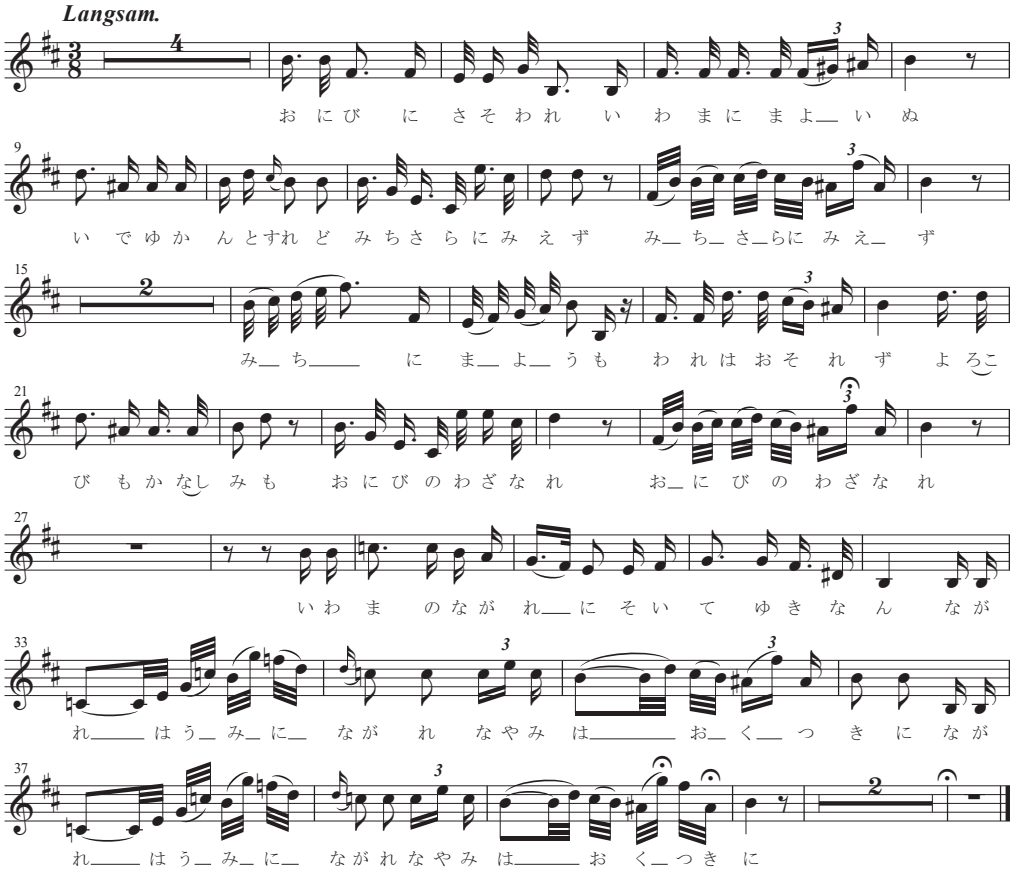
（本学准教授＝外国語（英語）/ミュージック・リベラルアーツ担当）

8. 回顧

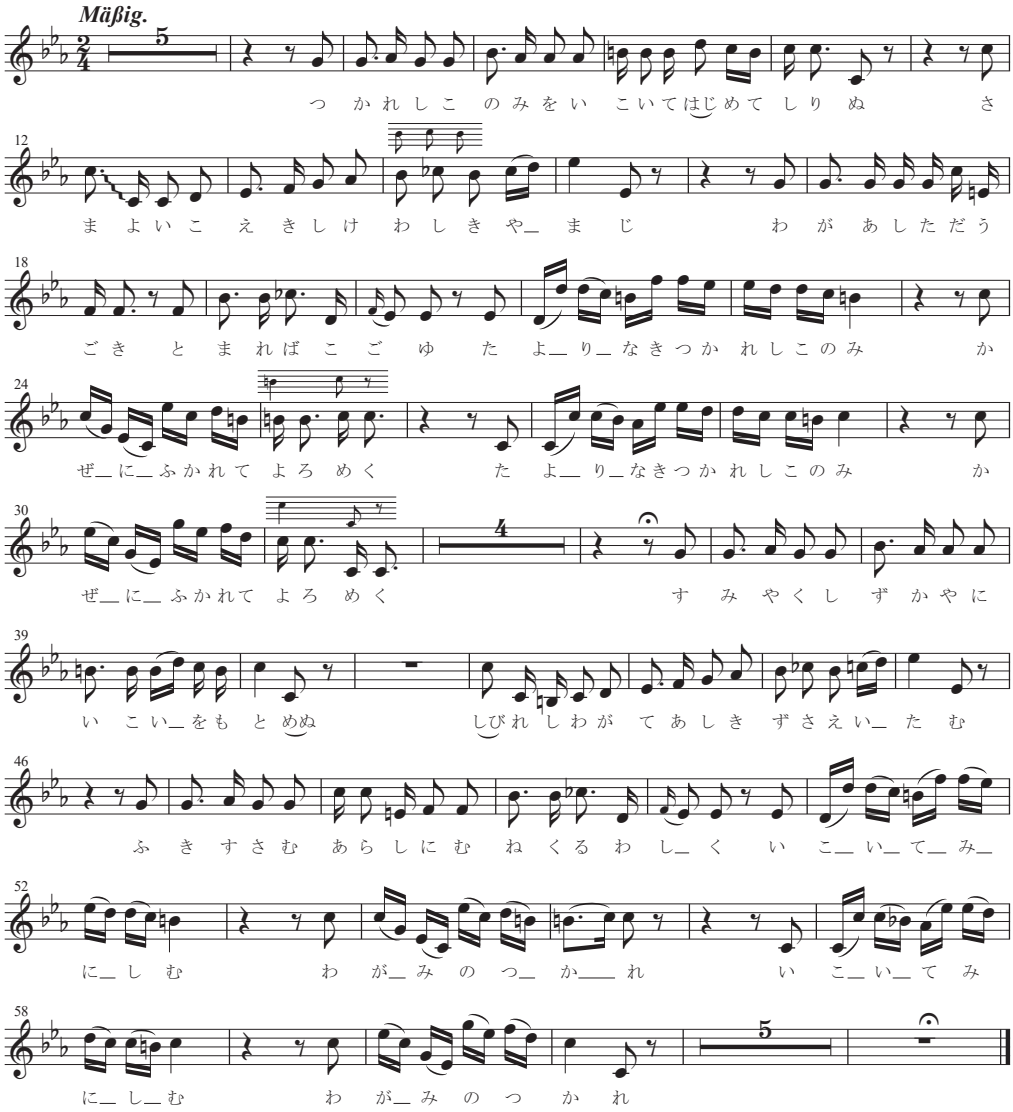
Nicht zu geschwind.



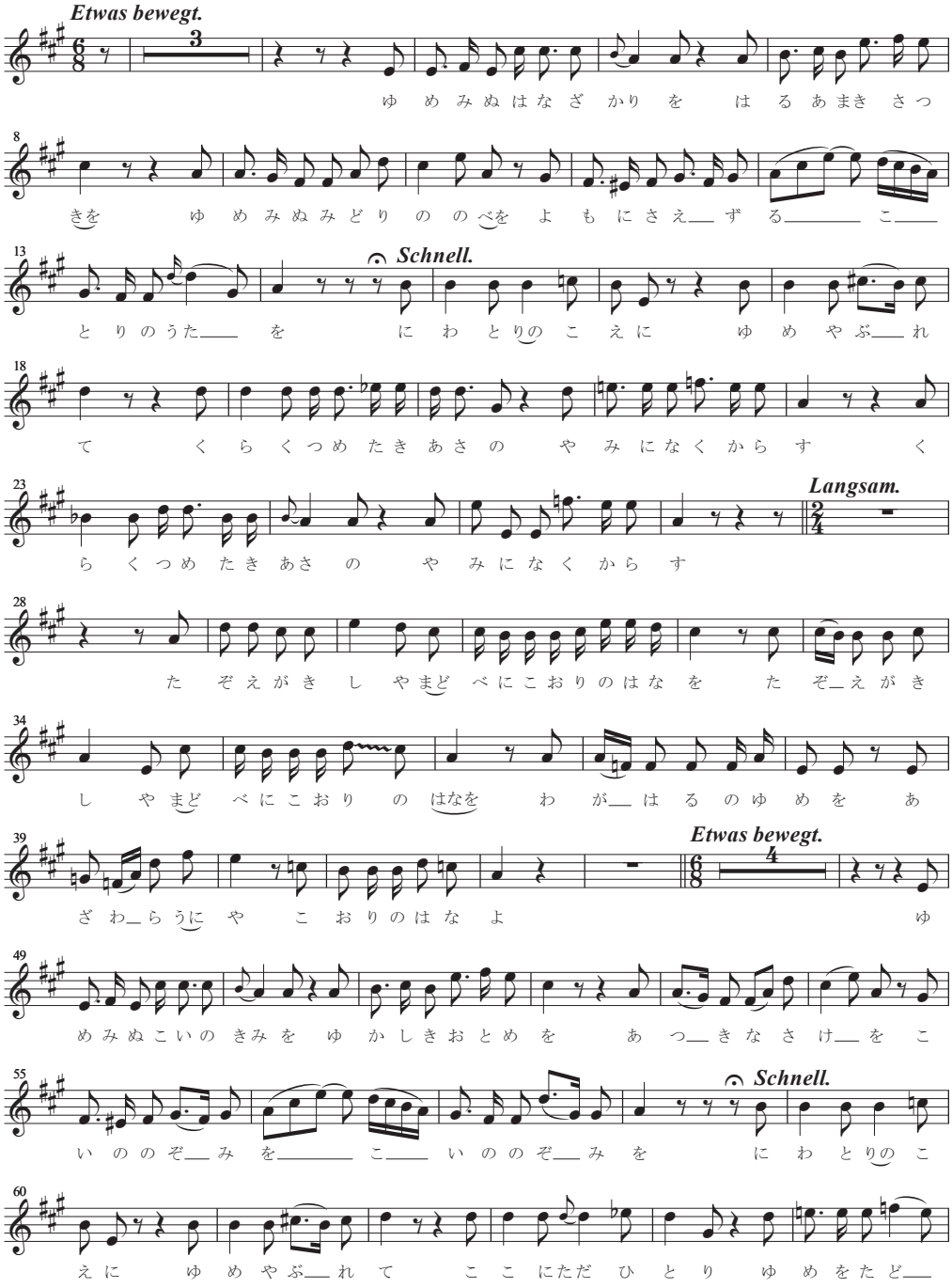
9. 鬼火

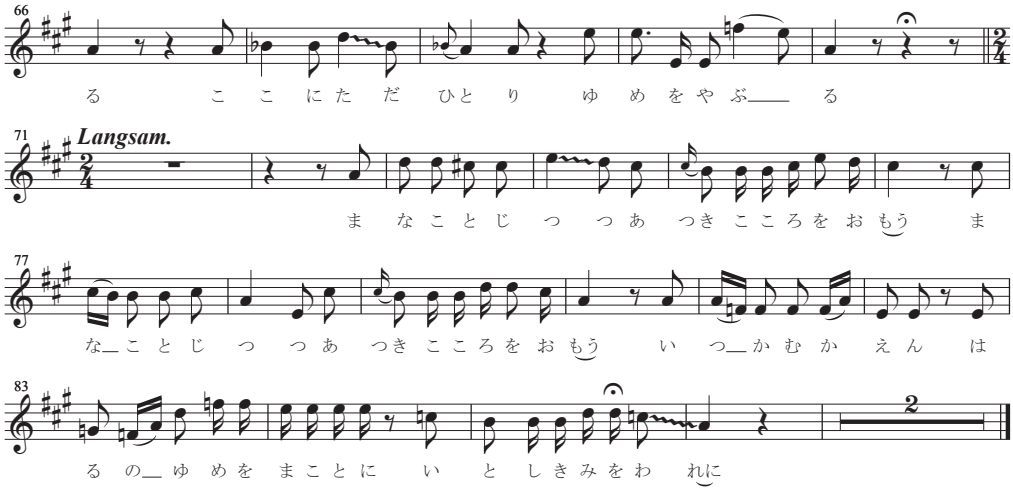

Langsam.
お にび に さそ われ い わ ま に ま よ い ぬ
い で ゆ か んとすれ ど み ちさ ら に み え ず み ち さらに み え ず
み ち に ま よ う も わ れは おそ れ ず よ ろこ
び も かなし み も お に び の わ ざ な れ お に び の わ ざ な れ
い わ ま のなが れ に そ い て ゆ き な ん なが
れ はう み に なが れ なやみ は お く つ き に なが
れ はう み に ながれなやみ は お く つ き に

10. 休息

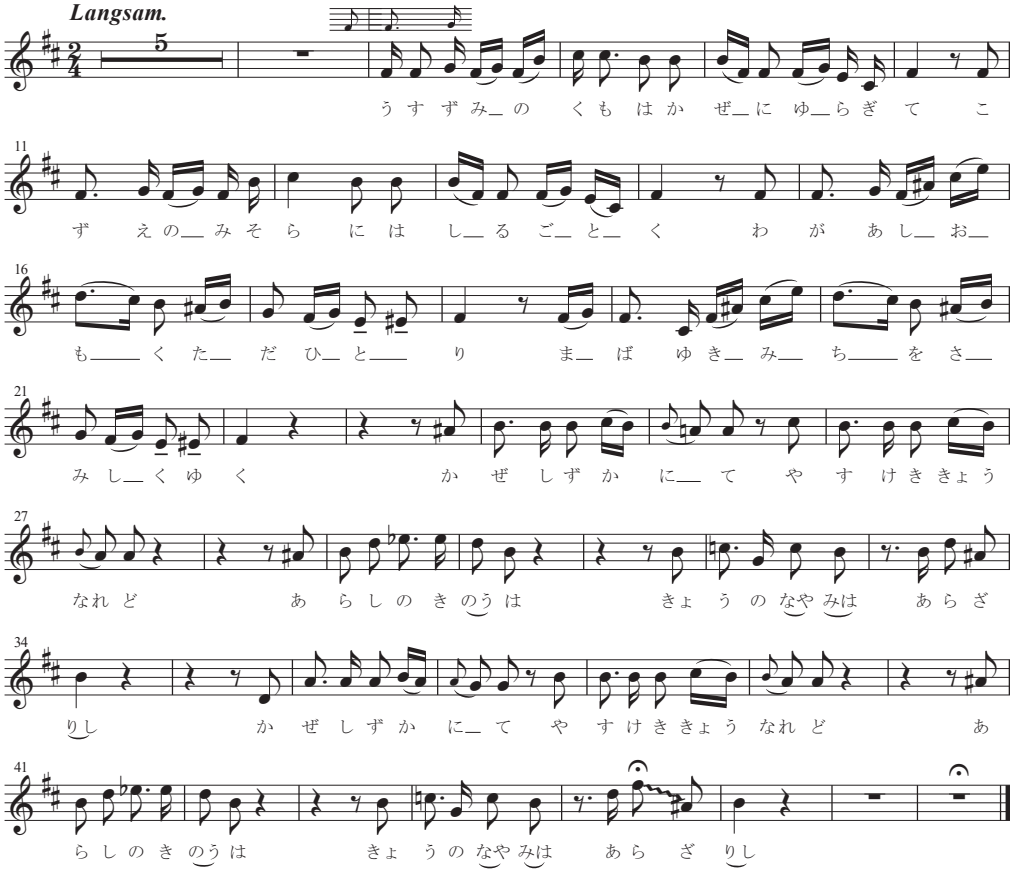

Mäßig.
つ かれしこ のみをい こいてはじめて しり ぬ さ
ま よいこ えきしけ わしきや_ ま じ わ が あしただう
ごき と まれば こ ご ゆ た よ_り_なきつかれしこのみ か
ぜ_に_ふかれて よろ めく た よ_り_なきつかれしこのみ か
ぜ_に_ふかれて よろ めく す み やくし ず かやに
い こい_をも と めぬ しびれしわが てあしき ずさえい_ た む
ふ き すさむ あらしにむ ねくるわ し_く い こ_い_て_み_
に_し む わ が_み の つ_ か_ れ い こ_い_て み
に_し_む わ が_み の つ か れ

11. 春の夢


Etwas bewegt.
ゆ め み ぬ は な ざ かり を は る あ まき さつ
きを ゆ め み ぬ み ど り の の べを よ も に さ え ず る こ
Schnell.
と り の う た を に わ と りの こ え に ゆ め や ぶ れ
て く ら く つ め た き あ さ の や み に な く か ら す く
Langsam.
ら く つ め た き あ さ の や み に な く か ら す
た ぞ え が き し や まど べ に こ お り の は な を た ぞ え が き
し や まど べ に こ お り の はなを わ が は る の ゆ め を あ
Etwas bewegt.
ざ わ ら うに や こ お り の は な よ ゆ
め み ぬ こ い の きみ を ゆ か し き お と め を あ つ き な さ け を こ
Schnell.
い の の ぞ み を こ い の の ぞ み を に わ と りの こ
え に ゆ め や ぶ れ て こ こ にただ ひ と り ゆ め をた ど


66
る こ こ にた だ ひと り ゆ め を や ぶ る
71
Langsam.
ま な こ と じ つ つ あ つき こ こ ろ を お もう ま
77
な こ と じ つ つ あ つき こ こ ろ を お もう い つ か む か え ん は
83
る の ゆ め を ま こ と に い と し き み を わ れに

12. 孤独


Langsam.
5
うすずみ_の くもはかぜ_に ゆ_らぎて こ
ずえの_みそらには し_るご_と_く わがあし_お_
も_____くた_だひ_と_____り ま_ばゆき_み_ち_____をさ_
みし_くゆく かぜしずかに_てやすけききょう
なれど あらしのきのうは きょうのなやみは あらざ
りし かぜしずかに_てやすけききょう なれど あ
らしのきのうは きょうのなやみは あらざりし

13. 郵便

Etwas geschwind.

まち よりひびくゆう びんのらっぱ あ やしくたか

14 なるわがむ ね あ やしくたか な る わ

22 が こ こ ろ ふ みは わ れにきたら

30 ねど な ど て かくはときめく わ が こ こ ろ

37 ふ みは われにき た らねど な どき こ こ ろは な ど てかく は ときめくむ

44 ね な れ や ひ とにきか ぬ まち

57 な つ かし き きみすむま ち な つ かし き

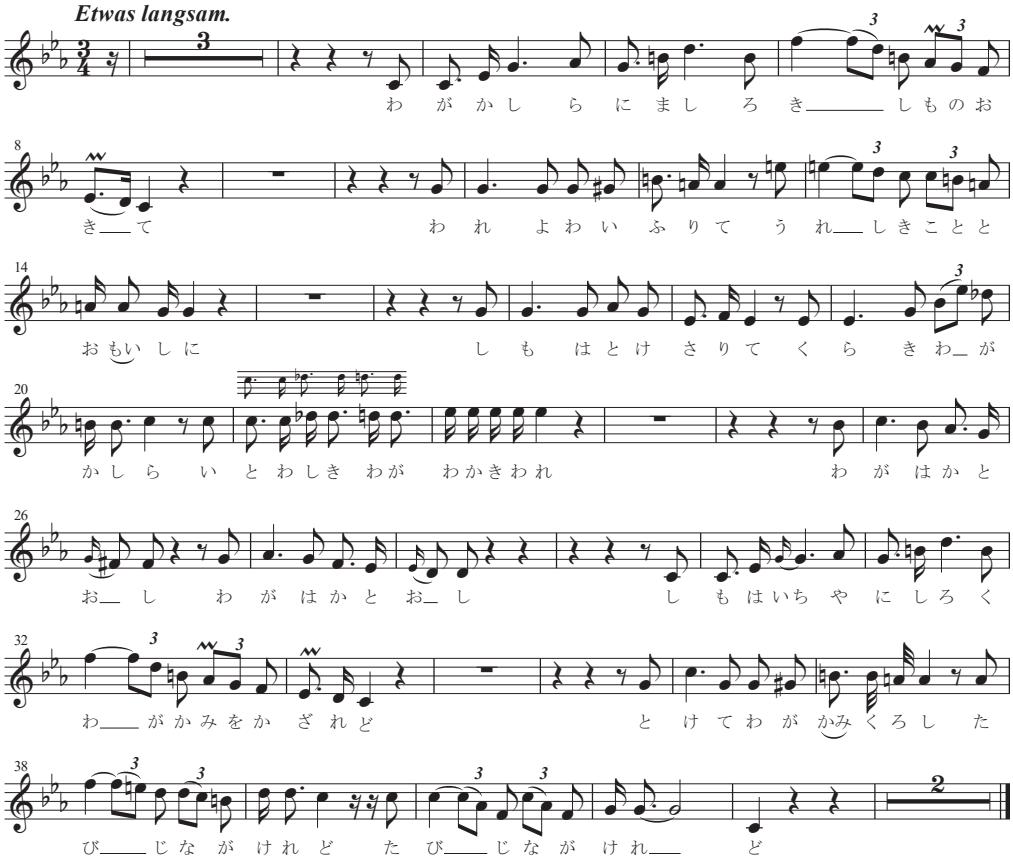
65 きみ すむ まち よ り のゆ う び ん た

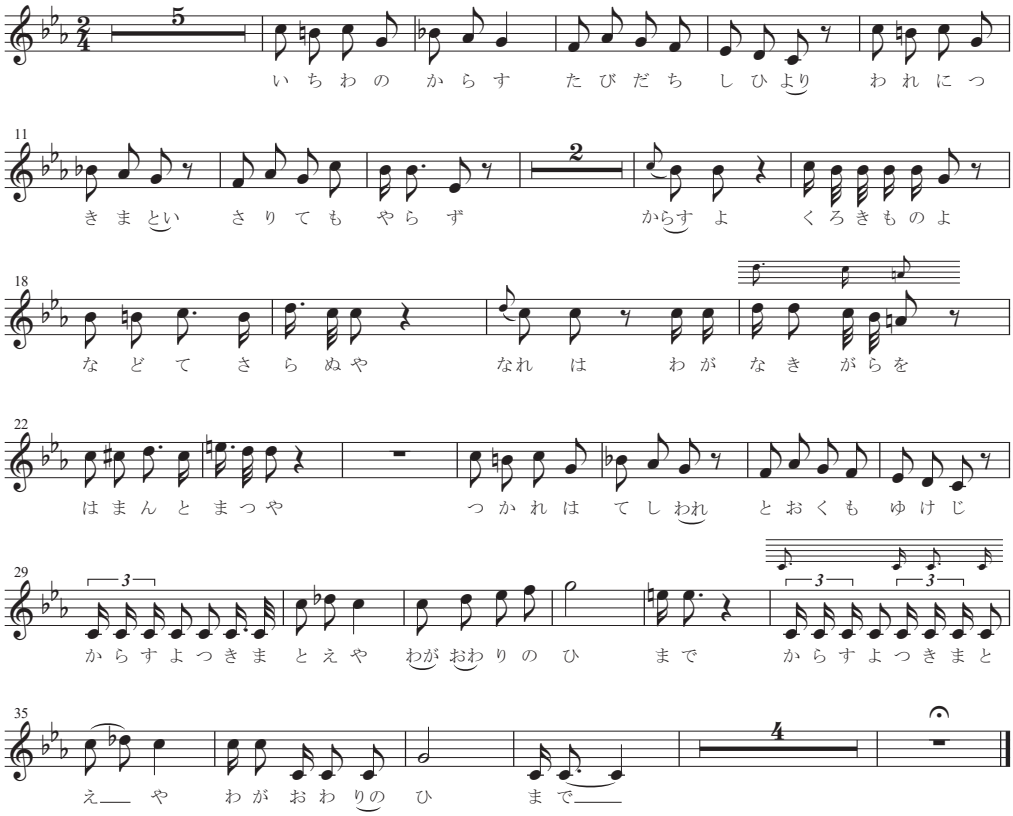
73 ずね み ま ほし や か な た の あり さ ま な

79 つ か し い た ず ね み ま ほし や い か に い

86 か に お わ す る や な つ か し き や き み

14. 霜置く頭


Etwas langsam.
わ が かし ら に まし ろ き しもの お
き て わ れ よわ い ふ り て う れ しきこと と
おもい し に し も はと け さ り て く ら き わ が
かし ら い と わしき わが わかきわれ わ が はか と
お し わ が はか と お し し も はいち や に しろ く
わ がかみをか ざ れど と け て わ が かみ くろし た
び じな が け れ ど た び じな が け れ ど

15. 烏

Etwas langsam.